

世界の災害現場で感じたこと

東京臨海病院

病院長 山本保博

ゲーテの言葉に「若き日に旅をせざれば老いの日に何をか語らん」とある。私ども夫婦の会話でも最近この傾向は確実に現実味をおびてきている。

私は若い頃から国際医療に興味はあったのだが、のめり込むきっかけは1980年からのカンボジア難民医療支援だった。この派遣の開始される前の数ヶ月、日本政府は「金と物は出すが人は出さない日本」とか「日本の援助は顔が見えない」とか「汗をかく支援を」などとメディアから言われ続けた。最終的に日本政府はベトナム軍やボルボト派に追われてカンボジアからタイ国境に逃げ出した70～80万人の難民支援に重い腰を上げたのは、難民発生から2～3ヶ月後だった。国境での医療支援は最終的には2年間に渡ってしまった。戦争を含めた人為災害でも自然災害でも結果の出やすい初動期を逸してしまうと、明らかな成果を上げるまでに時間がかかってしまう。

この反省から1982年3月国際緊急援助隊の前身が発足したのである。私はこのカンボジア支援政府チームで最初と最後の3ヵ月つつ現地での医療支援を経験し、また国際緊急援助隊になってからは、関連派遣も含めて24～25回は世界の災害現場に出動し

た勘定になってしまった。一般的な旅行として行くことが不可能な地域に行く興味もあるが、安全性に関しては、無事に帰国できるかなと不安に陥ることもある。

もう2年前になったが、スマトラ島沖地震・インド洋津波災害の際、私は第3次医療チームの団長として、インドネシアのスマトラ島バンダアチェに派遣された。スマトラ北部は、アチェ解放戦線が支配しており、渡航禁止になっていたが、戦士達が皆津波で流されてしまったので安全になったとのことだった。津波から4週間経っていても、患者は大勢おり、山を越えて1週間歩いてきたという被災者もいた。海に流され助かった津波被害者の中で、全身に小さいものは直径1～2cmから大きいものは7～8cmの丸いマークが無数に付いていて、その一部は化膿している。体力を消耗し泳ぐ力もなくなって、流木に必死でしがみつくなが精一杯だったそうである。このマークは魚に食いつかれた跡なのだという。動物に襲いかかるのはアマゾン河のピラニアだけと思っていたら、海には沢山の生きているものを食べる魚がいるようだ。

私の好きな鯛や平目も、人間を襲うことがあるのだろうか。彼の話でもっと驚いた

ことがある。大きな流木にやっとなんを逃れ、命だけは助かったと思ったら、目の前にコブラやサソリや毒グモがおり、この動物達も難を逃れてきたようであった。流木や流れ出た屋根にしがみつくのは人間だけではないことを思い知ったようだ。毒ヘビや毒グモ等にかまれたり刺されたりして死ぬ人達も多かったようだ。彼が流木の上で力が抜けてしまったのは、何かに噛まれたのだと私は考えている。

こんなこともあった。アフリカのカメルーンで北部のカルデラ湖であるニオス湖から毒ガスが噴出し谷合のニオス村で約2,000名が亡くなった。日本政府は直ちに医療班を派遣し原因の究明と共に医療援助も可能な限り行うことになった。

毒ガスの原因は220メートルの湖底から地震などで揺れた底の水に対流が発生してビールの泡のように立ち登ってきた大量の二酸化炭素だった。このガスは空気より重く谷にそって村を襲ったのである。現地に入って4~5日たったところでニオス村の村長から連絡があり、歓迎会をやるのだという。ニッパヤシの家で電気はなかった。

村長はアフリカ人共通の口唇がバラのように赤く太く、歯の白さだけが目立つ初老の男だった。タロイモ酒とともに真ん中に闇鍋があり宴が始まった。村長から歓迎の挨拶があり、やっとなんご馳走が手に入ったので計画したと手で持っていたのはアフリカミミズだった。キュウリ程の太さでずんぐりとしていて、これがツチノコなのかとも考えた。

村長は、現代の若者は人間に近いものを食べすぎるので長生きが出来なくなっ

まっているのだと彼らを指差した。動物は自分たちから遠い動物を食べれば、それだけ大きな魂が入り、長生き出来るのだと教えた。猿の肉や鹿の肉は人間に近すぎ、少し遠いのが鳥であり、もっと遠いのが魚である。もっとも遠いのがこのミミズなのだと説明した。ミミズの味そのものは、骨もなく焼き鳥の砂肝のようなジャリジャリとした感じで美味しくはなかったが、長生きできるならと無理して食べた。

もうひとつ心に残る国際緊急援助隊でのエピソードがある。エチオピアのチグレ州メケレという町に早越被災民の医療支援で出動したときの話である。子供の栄養失調は治りにくい。特に蛋白とカロリーが不足するタイプの栄養失調は治療に抵抗する。ニボシのように痩せた手足の静脈に点滴を入れても脆弱化した静脈はすぐもれてしまう。栄養失調だからカロリーの高い食物を食べさせれば良いと考えるが、食べる力や食べる気力がなく、口にバナナを入れてやっても噛むことも飲み込むことも出来ない。点滴がやっとなん入っても大部分が腹水になってしまう。患者は5~6歳の女児で、点滴と高カロリーの生玉子やバナナジュースの経管栄養でやっとなん助けることが出来た。この地域はコプト族という原子キリスト教を信仰している人達が多い。退院の日、女児のオバアさんがやっとなん来て、お礼をしたいという。キリストが信者に病気を治したり、盲人に奇跡を起こした際、信者はイエスの両足の甲に接吻して感謝の意を表したそうだ。オバアさん自身も信者がイエスにした通りに感謝の意を表したいとのことである。私は驚いて通訳に気持だけ頂くのでそれだけ

はやめて欲しいと懇願した。オバアさんの意志は硬く自分の孫に対する感謝の気持なので、気の済むようにさせてくれとのことだった。私は今でも両足がブルブル震えて

いたのを思い出す。世界は広くまだ分からないことも多い。世界には言葉の壁、人種の壁、宗教の壁、国境の壁など多くあるが、これらは全て自分の内部に潜む心の壁が原因なのだろう。